音声言語と視覚言語

私もこれに似た実験をしております。私は八王子に自分の研究所を持っておりますが、そこでいろいろな実験をしたいと思いまして、精薄児の学級を設けました。チンパンジーを使った実験がアメリカでどのくらい行なわれたかわかりませんが、チンパンジーが、音声言語は覚えられないけれども、視覚言語は覚えられるということは、いま申し上げたプリマック夫妻とジュアン・ランボーの実験で立証されているわけです。重症の脳障害児の場合も言葉は覚えられません。言葉というものは、言うまでもなく発声すると同時に消えてしまいます。たとえば、「鳩」という簡単な言葉にしたところが、「は・と」という二つの音声から成っておりまして、「は」という音声が出てくるときはまだ「と」は出ておりませんし、「と」が耳に聞えたときには「は」はもう消滅しているわけです。「は」と「と」を一緒にまとめて、しかもそれに「鳩」という意味を結合させることができなければ、頭の中に言葉として記憶することはできません。ですから、知恵遅れのひどい子どもには言葉がなかなか覚えられないのは当り前だと思います。

ところが、視覚言語は消えてなくなりませんし、視覚的なものですから、たとえば、鳩なら「鳩」という漢字とその実体とを、同じものなのだと言って教えてやれば、どちらも視覚的なものですから、この二つは必ず結びつきます。「漢字は視覚的なものだから、覚えるまで消えないで待っていてくれる」――これが言葉と違う点です。ひどい脳障害児の場合でも、言葉はなかなか覚えないのに、漢字だと覚えられるわけです。

私は実際にそういう指導の仕方で、最初はたとえば、時計なら「時計」という字と時計そのものを示しまして、これとこれは同じなんだよと身ぶり手ぶりをしながら教えてやります。そうすると「時計」という漢字と、実体としての時計とを結びつけることができます。水を教える場合には、水飲み場へ行き、水を実際に流して水に触れさせ、「水、水、水」と言いながら「水」という字を教えます。池を教えるときには、子供を池に連れていって、「これが池だ」とくり返して言いながら「池」という字を見せ、これとこれ

とは同じなんだと言って教えます。そうしますと、その漢字が何を意味するかは、そんなに苦労せずに覚えます。言葉は覚えられなくても、漢字は覚えられるのです。

こうして子どもたちが漢字を 20 字、30 字と覚えるようになりますと、今度は言葉が言えるようになってくるのです。漢字を読む脳の働きが脳の働きを高めるのです。大脳生理学的に言えば、図形を認知する神経中枢と音声を扱う神経中枢とが神経繊維により結びついて、その間をパルスが行ったり来たりするようになり、頭の働きがよくなるわけです。同じことを何度もくり返すことによって神経繊維が太くなり、パルスが通じやすくなるのです。

現実に、口がきけなかった子どもが口をきくようになるのを見て、私もこれには驚きました。「言葉は誰にでも覚えられるけれども、文字は難しいのでそうはいかない」というのは、全く誤った考えであるということが、以上のことから明らかです。

言葉は、人類がこの世に現われたときからおそらくあったと思います。ですからずいぶん長い間、人間は言葉を操ってきました。それに対して文字を発明したのは、たかだか数千年で、とても一万年にはならないと思います。そして現在でもまだ、地球上の人類のうちの半分ぐらいしか、文字が操れないのではないかと思います。つまり文盲がまだ多いわけで、そういう事実が、文字は難しいという考えを一般の人々に植えつけているのです。